

近世
物語
巻之五

85
八遠 13
1299
5上



近世怪談霜夜星五卷



第八回 種彦の茶器

東都 種彦著

往年於澤がりて、伊六清を媒姫あしき。道具屋三次の免前
 詰計のちらぬ疎く、博撃めく金を得ん王を執りて、夫
 もうらつて、く仕合あしき。又媒公をあらん小も、世人皆三次の
 言葉をしき、之両古を弄さるを、知し、誰あらく、彼不委る者も
 多く、いふせんといふなり。下總國銚子といふところ、小旗戲場あ
 り、その責主ふと、りいつと目代とあり、く被知へ、あり、死松、半
 孫が、門系、松、島、子、三、竹、中、吉、三、郎、が、門、系、竹、中、半、七、を

霜夜星五卷

ちんどの計東あらんも知るづらうと喉のぶぶくと鳴をらん。
 けいふ不喫子ありとけいけいけい一杯をも飲されば彼男つてけ
 飲小のさうらう大酒酔を蔑く。草鞋を履るや管笠を枕に。
 前後あうげ勢睡あはれ三次たふやく公あつた例ふある鈍子を
 けい一杯飲ぐ舌鼓あはれ。嗚呼人の體面ふるらうけいけい彼い
 けいをさ酒あはれさふささんと志をあらん。斯と知ぶさくさう
 飲ぶ憂をたるらんりのをと又五六杯飲る不彼男さうふ起
 あうら三次をいらら。最早申下刺あるふとけいけいさうらう間
 不彼男の枕囊懐中さうらうさうらうから書筒やうのそのお散ら
 三次喃々とけいけいさうらうあやめんとまじ。不斗彼書筒の上がけを
 える小道具屋五郎次といふ名當あり。さうけい此男も我と同じ

結討をさひりのあうんと。おめけは彼書筒をけいけいけい何某殺
 かぬく茶交を好みい一處小高西領飯塚村乙戸源藏といふ煮士
 近境の茶堂守恒が茶抄甚四郎が茶筥一路が手取鍋の母り
 種々の茶器うりさうらう。何卒四十兩ほど小買さう何某殿へ
 さうちがんほどあう幾許の利やあうんと其夜委細小書つけあれ
 けい三次あうらうけいけいさうらう常言ふも長者の田の實のるさ早
 一とやうんけいけい十兩小あある金を利得又不意金のつるふとら
 つたぬかのみ小此男さうらうけいけい一独言いあの一賣あうらう何某殿
 茶の好まへけいけいけいけいけいけいけい飯塚村へ赴き
 此茶器を買さうらう何某殿へさうあがん小幾許の金を得ん
 も知るへさうらうけいけいけいけいけいけいけい彼男叫人とけいけい



是れハ
 江戸ノ
 名所ナリ
 其ノ
 趣ヲ
 示ス
 云々

江戸ノ名所ナリ



此ノ
 趣ヲ
 示ス

江戸ノ名所ナリ

けり先刻不もいひし。三五日のうち急度五兩をもらへし。是
 けりれさくの典物ともえんと己が着るる兩衣小只一腰のさし
 こんどりのえくさ。出せ被處士莞余を。足下いひし君人
 ふ似氣も死も説く死男之日外来し。五郎次と云甲幹ハ只營
 三十兩めく味りゆえりてあれを許さ足下かくのさく差
 実なれば正しく五兩をも贈らるべし。いりおも典物も茶
 器の柔く預つしといふ三次の歡び金を改道具をうけり。
 異日来るべしと急に故御ふかひり。子の疾の兒童の春待る
 寝もやうびり色日頃自利不疎く。同子の物異名く目無
 三次とりひるるを面悪くさひく。此茶器ハ被道具屋の目利し
 を先へかりと買とりこれの百小一り利を得ぬといふじと明るを

かりく何某殿の館ふり。如此くの夏いりての番士眉をひそ
 ぬ相公茶夏の好とめんと。器物を索ふふと少少つた。次
 密も前とすく人んと裡へり。少時あつて彼番士立相公不
 標故をゆえさうんと此方の館あつてその茶器索ふとあし
 かひへるし。門遠あやあるらちと答る小三次ハ心的起語。あれさ
 口をさるとすし須臾言葉も出さりしが。急度探念をさる。あ
 り。いふ同子の者へ賣あつて十兩二十兩の利を得ん。さう
 やとくべくと夫被とんせりれど一目足るより冷笑ひ合ふ。あぬ
 目無三次が仕業や。さういひ皆偽物めく僅の金もさうさし。
 妹の空言の妙計あるべしと。高賣の道ハ疎くと異口同音
 小いひのされば三次ハさうさしと路をいりて飯塚村へかきえれば

宿夜星

三

彼家へくく戸をくくあり近鄰の人不同此舎ハく空室あり
 日外何よりいひ浪人一月をり住り其後いづく人かこつや
 知らず知る者ありといふ三次ていやく棍徒あるをを
 けしと更ふ詮えん茶器を大地に投げつけられぬ。ゆりの御人
 けしと更ふ。風子ありありありとけしひる。此物語の幾り
 とりへ伊去結を於釋が許へ接脚塔とせしり。かゝる珍事
 出来たり。あつたあれと強三次が業ありぬ亡霊のこつた
 もあり。いふ命不恙ありありと千辛万苦く利得し。金本
 金さん光棍の為不奮と。いふ多年媒を良とし両舌をりて行前
 賃をいひたり。因東車のめり来りありあり。あつた
 けし浪藏といふ浪人を何人といふ不是則卯月官太夫あり性

年求次郎を殺害あり。あつた場を立退奥州のこへかめさし
 りり又下總國鉦子といふ處へ来りし刺彼三次といふ愚人三十五兩
 の金を得て古郷へくつを知らし同子光棍門平といふ者を買ひ
 小抄拾せ根る。どの書簡をかきと。三次をりや。い計り
 門平はりの日酒房にあり。い合し。次の日の夕ぐれ官
 太夫が假拙ふ来れば。い三次の茶器を買とり支りし。いと
 官太夫門平をり。首尾あり。いとく。とらけい。彼金を分
 りあり。え来空房をまぐ。いほど借る。あつた。次日。い
 たり。いづけ。門平をい。葛飾のこへあり。い。泥田の渡に
 り。い。い。空俄に結陰。いと。い。雨のこ。い。い。二人の松の
 立木。い。い。袖笠。い。い。津頭。い。い。い。



Handwritten text in a box, likely a title or a short story description.

Handwritten text on the right margin, possibly a page number or a chapter title.

津長空を仰ぐくつ西山不蝶々雲とつ出く見くさゆも西
風のつり吹なるとつひつ舟を轉せあるこの岬ふらつる二人
へ舟不乗うつらり門平不斗官太夫が掃枝の斤らるるをる其
故を同官太夫外不乗合るるをるるをるる其れあはれと語り
いでりるへえ此佩刀の道あるぬらふと得つじら其後求次郎を殺
害の刺鉄鏡不打ち故にやふく行くと抜出しく門平不元
七又懐中より杖囊をとり出し此品も求次郎が所やく三
谷少く割懐しと金五十兩ありつるが日あらはれしく空しくなり
そくもやび六の年月懐中るせしが六の頃又足下の計東あ
やしく重なるを得つりと物語るらるるや舟に向ひの岬ふらんし
やいといふらんさび棹むととけむく舟中へ漂ひ出るその時

一陣の風紙と吹来り怪むへ高浪逆波のさうさくさあさくも洋
中ふあるが五三人周章うさめけと遂に船へ波をおあも舟へ
るく水底へおたれあさるる舟長の手割し業く波をらるる
波つのだ官太夫門平の業を為得るべ底の水層とあり
るくりるかするそのの枝流みく鱷あやりの所為あはれ在る
あはれ又一の因果物語あり下回を讀得く莫詳不知るべし
第九回 尼がいのり 鉦鼓の観音
休頭且話花方求次郎が鞆鞋作助の何卒しく主人の警入官
太夫が在野をりり一太刀ありと怒人と警人の身よりへ
夢へ遠く逃人も知るるびと金百兩盗とり亡命あせりと

いひつらう。髪を刺圓順と名をあらうら。神社仏閣回国の修行者とさやをうへ。雲氷の身の常あがり。岩りる水不渴をまのさ。朽る橋不所を踏以長灯曲鋪の娘といとらび。まやも五年を終て東國ハおちもあく。揚しけしとども運つてあうらう。回影の似ま。うへ人も環會以官太夫が水死をせしとひやあうら。又西國をや揚しんんと。水戸街道をうらまら。暮飾する夕真の観音。一疾足不詣ぐ。僅五六町ゆらりしふ。いふくく。路ふやうら。つおふ人家もええび。如今ととあうら。四本亀割沼田のつし。一回不荒く。荒野あれど玄冬の時節あれが千種と霜ふ。これ。かりくも東北風起しく。柳絮風ふまう。うひ。然も。おひらぐら。大雪地おつら。夏八寸むら。圓順いる。因らうら。

あやし。小ひらうの流木もひ。樹林あり。見えれば木くハ時あらう。さ花うとあやし。見えかろ。水ハ蓋ふ染るうら。いも素し路も。あくとえく。右へゆらんや左へゆらんや。己が足のむくる方をあらう。両岐いも。決せざる。呼吸も。暮やねど雲うら。不のらう。被樹林うら。忽地燈火の光角を。圓順むふらうら。立らう。えれ。果くく。一つの菴あり。向あうら。荊棘垣あり。く。覗けハ横らう。雨伽椰を埋ち。い。と。あうら。ぬぐく。も。あらう。障子の。く。夫ら。香の煙も。を。ゆる。仏檀不燈明を。か。側不胡琴。一。あうら。の。人。く。い。え。つ。あ。い。色。と。同。業。門。の。菴。あ。う。ら。へ。此。不。主。庵。ふ。か。う。ら。ん。ほ。ど。う。ら。ハ。強。く。も。一。夜。の。宿。を。り。と。ち。ん。と。いと。本。意。う。ら。向。い。と。え。く。前。面。の。流。木。掉。さ。う。く。素。る。一。葉。

のこりし小舟あり。あは正小蘆花の畔小宿されば半養小
 雪をさし歌うと根葉のうげをさざれば瓶舟小秋をのこり
 と異國の人のいひし紅塵の外とて。あは處をささくやいひ
 んと暫時詠るうち。被掉さそく者の養の雪うらちらひ
 さらしる身のをの雪を晴ぬべし妙の心法りしりのやまやせ
 と吟ぐかりり。望るるをえとて年三十むかりのうたあやあり。
 翁のまろく小梅の香をとめ熟るるへいひむらりあり。翡翠の
 空竈あるをなすりりさくさくさくさく墨染小窄くさ内へ散も
 ちらぬ花の枝を山風のささひく。末汲里の白ひふるくこ
 下もいふなす。あは則此庵の主とて人枝おすを六雨うら
 庭前小漕うせとく養篋を舟小舟。むらり死寒紅梅を

行字ふりら。行字に一串の念珠を低く勃卒と赤ふのほとて圓
 ころみ。あはれは色同行の格行者あるが降来る雪の路ふらり
 村のせいやど何方ある夏をさうげ憐れむらり真尼花軒ふ一
 夜の慈悲をせんさくといひいふれば彼尼ゆくとこの小菴の
 ひとあふ訪ふ人もあは蓬生小何人あらんと。枝おす押ひら
 と圓順小對くさの回國あまの舟の此雪みり。さや難
 美あまらん。さうりりり志ひは仏の遠夜みくひとて此方うらや
 と成とて宿中うらやんが。いとくも安かゆとてえ女の一人住ん
 山同行とあふ。角も角とせりあはれと仏つらる道ふあふ。さ
 右のさくらふらうらやまへ。小梅隅田村へむと遠くともさうら
 彼處ふらりと宿をりてあり。常香の火ぐらをさるめと中と



雨夜皇卷之五



あまのやまのあまのやまの
あまのやまのあまのやまの
あまのやまのあまのやまの
あまのやまのあまのやまの

雨夜皇卷之五

あはれ破のさよあり。一度尻をうたれば一夜の踏をさくりぞく。
泉の響小異らるる。将終らるる声の去らるる。あはれ空飛雁の
連もさるる。らん。園頃も少時ゆとさく居る。うら。願くは前ふ
香をひねりむふ。おひ。へり。と運つてさるる。く。枕入ふ環手
ついでの日。又ふ。鮮のそは。あはれんと。不斗。鈴。うら。から。杖。を
見る。ふ。掃枝の。か。さ。さ。く。南無阿弥陀佛の文字あり。懐中
より。求次郎。が。死骸の。側。ふ。落散。たる。掃枝。を。より。出。く。あ。せ
る。ふ。あ。ら。る。ざ。れば。大。ふ。怪。む。あ。の。女。僧。堂。く。敵。官。太。夫。が
枝。葉。ら。る。ん。ひ。つ。ら。ら。く。詮。議。な。ま。ん。と。か。り。へ。ど。短。慮。不。遂
切。と。や。ん。胸。を。さ。ひ。り。名。曲。と。さ。さ。く。耳。ふ。い。ん。頑。く。尾。の
傍。へ。ふ。ら。ら。り。ふ。不。尊。尼。此。棒。は。是。翻。掃。枝。の。さ。く。く。ん。だ。と。し。く

か。る。物。を。持。つ。ふ。と。回。ふ。尾。は。胡。琴。か。り。の。掃。枝。ふ。あ。と。い。と。あ。や
志。此。物。語。の。さ。さ。ら。る。ふ。さ。く。三。月。の。あ。り。前。面。の。川。上。る。る。渡。場。あ。り
舟。覆。り。如。此。く。の。夏。あ。く。衆。合。二。人。溺。死。せ。ら。元。来。水。練。達。は
う。み。長。水。を。さ。ひ。く。さ。せ。も。遂。ふ。死。骸。ふ。ん。だ。過。去。り。ら。る。
其。頃。殊。ふ。麗。あ。る。日。り。ふ。と。青。草。を。踏。く。鬱。を。散。ら。んと。筆。頭
菜。金。簪。草。の。か。づ。く。を。摘。又。は。川。畔。へ。あ。ら。ら。り。根。芥。ら。ら。む。ら
ふ。乱。梳。ふ。ひ。さ。さ。ら。ら。く。一。つ。の。利。織。あ。り。泥。砂。ふ。塗。れ。ざ。と。は
持。帰。り。く。さ。る。ん。袖。の。中。ふ。重。さ。あ。り。あ。れ。則。ち。の。掃。枝。へ。近。鄰
の。昔。の。と。ら。い。先。日。水。ふ。漏。し。入。の。羽。織。あ。ら。んと。い。ひ。く。ゆ。の。日。の
舟。守。ふ。回。へ。い。う。ふ。と。見。夢。の。さ。さ。ら。る。あ。ら。と。世。を。さ。さ。く。ら。る
ゆ。の。一。遍。の。圓。向。あ。ら。と。い。ひ。さ。さ。く。あ。ら。と。く。ふ。幸。掃。枝。ふ。い

舟守ふ回へい

舟守ふ回へい

南無佛の支字ありゆへ鈴をあらは棒とあり。羽織のみのぶ、
 鉢盂中とあり、さうと一柱一付をあらは丸頼とあり。とゆひは
 阿とつらひ、鴉人綱をぬく江のつらひ、鴉人ぬへあつびとつらひ
 異なる夏あり。波紗服を穿洋中へあらは。かゝるもつらひは
 あくつらひとつらひとあり。べんが果しく官大夫が親類あらん被
 緑林白浪の類あらはつらひとあり。あれ根あら腕言つらひ
 つらひ主君の仇人何卒しくつらひとあり。おふとつらひ念仏
 手は應ぜつらひ。鉦をあらは。つらひとつらひとつらひとつらひ
 つらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 大高不成とつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 つらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ

元圓頂老実ある性あらはつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 中へ尾を踏落し只管責問つらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 つらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 の敵逃さつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 執着とつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 おまうつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 なるばつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 の家臣作助あらはつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 とつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 の仇といひつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ
 各号の掃枝のつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひとつらひ

あつちのあつちの
あつちのあつちの
あつちのあつちの
あつちのあつちの
あつちのあつちの



あつちのあつちの

あつちのあつちの

あつちのあつちの

あつちのあつちの

あつちのあつちの



あつちのあつちの

持より上總國へく雲舞半六といふ悪棍つらかを棄ひ
 味を殺し立退しとてこの掃枝おらびおまこの賤室掠取ら
 のり卯月官太夫と姓名をうへささるる風説ふ伊六
 諸共うろく探索ととも縁あくる回逢ばいよ外面のり
 かく掃枝より寛獲らる首尾おろく歩しゆへ足下のり
 めふとかりひ夜眠不官太夫とゆひ遠くと語り圓頂もこ
 とふをうらりい主水次郎君の仇人といへるも彼らりとそめ
 を語りをりてをいふ花子圓頂小對といたるもかく浅畧を
 る寛とてなふ此尾君の寓し寛実寛なるもや大なる衆忽
 らるとと忙敷扶起ひ不尼ハ言葉を出さんとそれど口着り
 くとつやく言おび花子紫を焚尼の肌を燻る不中あらく

淡湯温泉のぞく漸くは口をひらけさくら水君の由縁の
 ばあつひしや。いふに長けらんりらやと掃枝の妓女津嶋
 とゆらう圓頂愕然とてさくら水君の寵顧他不異なる端人
 を神さぬ身のあはれく暫時もいひを苦くしゆらりけり
 つらうんちんと胸を押し卒忽をりづる不津島尾の
 いやたな重ひとけが主君大切とていふはさるる後
 せがいつふあはれさるふいけらん戒君横死するひさる
 眉を画さ紅唇を彩ふ不憂く且みは淡黄泉の路おさる
 さるるの子黒の月小唄くゆらなく花巻の昔痛をさるれ
 さのわらりの由縁ふらり只管後の世を嘗もさる皆水君
 の善枝の爲ふとて先お宿すいらちんと俄おさるは

花露又落信士と唱へしふらふ又とて支字ありさくははる
 の志もふはれはれ又ふらふらく死ふらふらと身ふつふらと
 上らふらとふらとふらと知らふらと則求君の法の号ありとやと
 哀れふらとふらとふらとふらとふらと物語に二人も共ふ
 せし旅へては求君の仇敵ありらふらとふらとふらとふらと
 物れふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらと
 られへ則官大夫が羽織さふらとふらとふらとふらとふらと
 せしふらとふらと二人も懐刀抜連く物敵主の仇良人ふらとふらと
 求君の積死の積が罪ふらとふらとふらとふらとふらとふらと
 ひたふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらと

度の面へ白の羅のうへに砂金をちりちりちりちりちり
 一陣の烈風吹来り燈火翫とふらとふらとふらとふらと
 蛇空中より来り津島尾の口のらふらとふらとふらとふらと
 息ふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらと
 一時ありと頭をあげ花子をふらとふらとふらとふらと
 ちりちりちりちり此世を去りて澤雲へ汝ふらとふらとふらと
 この女僧の體をうらふらとふらとふらとふらとふらとふらと
 ちりちりちりちり須史の向もふらとふらとふらとふらと
 我智ふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらと
 明珠連城宝ふらとふらとふらとふらとふらとふらとふらと

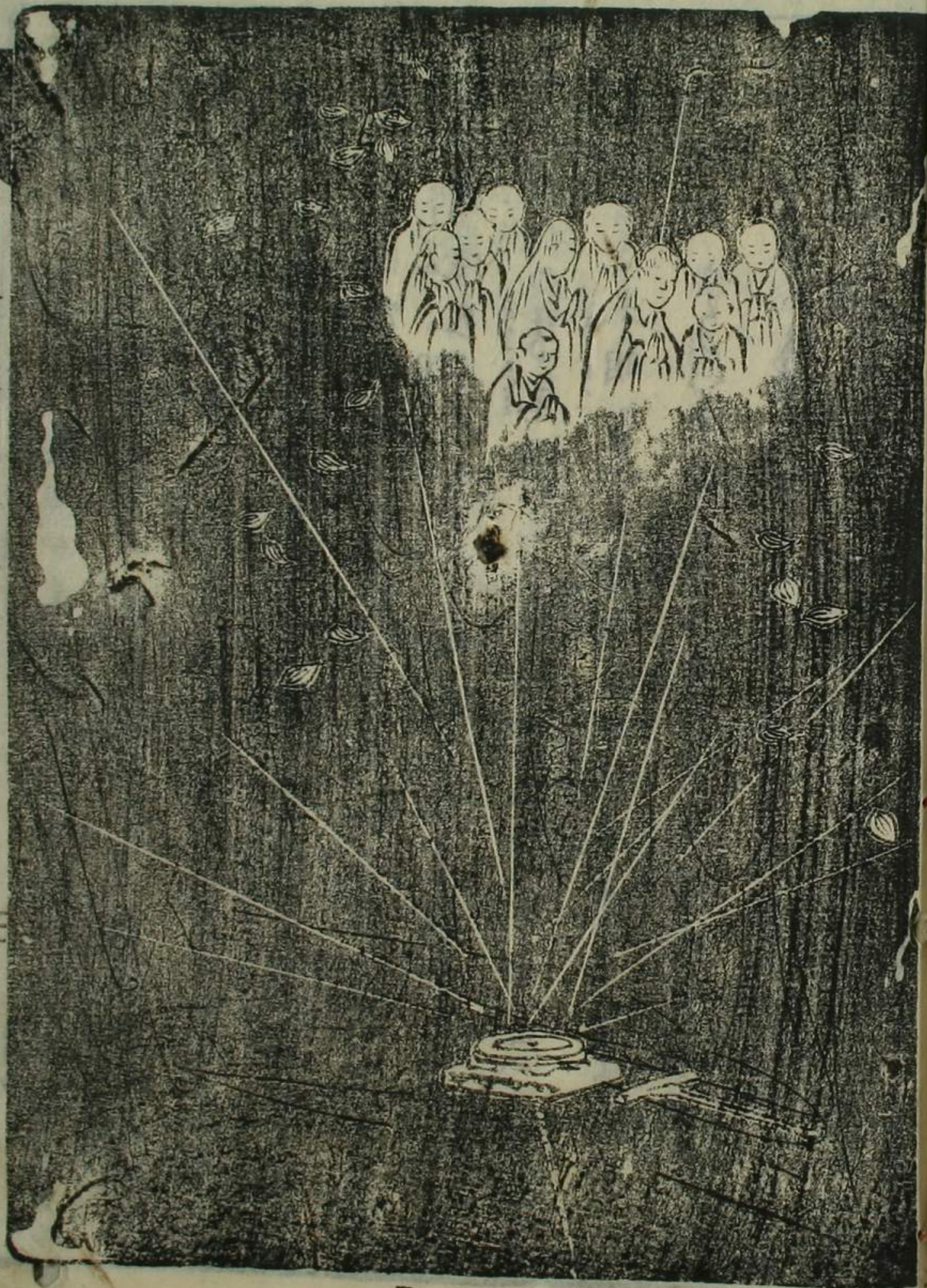
新夜屋巻之五

三十一

憎くともひらの疾替ゆく悦五郎を殺ししるふ愛子のけうと
ふらり伊去孺うを俄に弱り兼く怒んとありへど法華注小
も説く入氣猛るるそ思ひ水火も焼瀧まき竟あつり虎豹
毛牙をうとぞくく。あのそ死に臨むあろのち小村子伊去孺
を狂死せしめ汝をもあろくもらふとありひくく諸國の美
場を巡狩し。伊去孺ハさるそいづあろをも吊みゆへありと
るんぐを殺ししるんあれ我為とく一遍の念仏をも唱ふる
入へあろざるあと羊を殺ししる。大徳の教化あり。天竺小
社を得んと遠くく。汝孫仏門ふり。伊去孺二人の兒乃
あと吊みぬ。りは因小語風さん。大途血途刀途合く三途
の登ふらくく。ふ求次郎の横死ハ強けがれ死しあもあれ。

彼が所持するいとそくく神符を血をぬく穢せし。天神地祇
の四討を兼つて官大夫が。銀の錆とくえうをぬりてその虚葉に
金吾小狂氣あつし。伊原の家をくわしぬ彼卯月官大夫ハ
求次郎を殺害する。袂囊を棄ひたり。彼神符中ふありしを。
そのちりそくともやうに持たりしが。此神符ハ河泊の好むふり。
二月三月の間の海若の免をうけ。遊行する月の月多れへ舟小
葉寛をあつし。税部の警しうご官大夫ハこれをとらうに
舟小葉くく遂に命を失ひし。けが怒もつらふつね花子
ふい人のあつとを帯ふ小あろくと言ひたり。がごと倒れし。此の
小蛇庭前へ出るとるへ一塊の觸體とありぬ圓頭ハ死
具のりのがたり一伍一付を歩ろく。けが本意を遂ざる由縁を

後以此切德
手等施一切
同發菩提心
往生安樂國



あり。花子ハ今ころ圓頓がめも人も向まへくと居る。さう
くこの擧げと涙かさめく尼を抱かす。圓頓諸共介抱さ
せ。漸く息出驚夢の覺しむ。いりある支といふとをさう
圓頓花子ハ有枝有葉をのりさう。三人等く誘合をさう
中みりく圓頓花子みむ。いりさへ仇人官大夫を討んと
出立し墨染も今いさうく仏縁とあるぬ長らく人々の
を帯ん二人の尼びいさう。花子さうくいりさへ
上總國なる光明寺へと赴るね。同庵にまきこじんい
圓頓頭おさう。いりさう三十ふささる女僧とあるが室
へ人のおりらんめも人もあへんか。らんとうりひら
ぬさう。二人の尼小別を告。鉦をさうしく出たね。二人の女僧

光明寺へおりしき。形さうする。庵をむさび。仏さうり
責さう。夜さうくさうり。鉦をさうさう。さうり。賤の目
指さう。指さう。佛名を唱へあさう。さう。年をさう
然と凹みさうり。さう。或夜の夢。小音楽の聲。雲中
えさう。さう。頭をさうさう。空を望む。ハ
さう。容顏端美の菩薩莊嚴の蓮華に坐す。雲
来りさう。あさう。さう。掌をさう。合を
伊。さう。子。木次郎をさう。さう。さう。死
さう。者。さう。婆。さう。あさう。さう。さう。か
南無仏と唱。さう。さう。さう。ハ。松。吹。風。小。夢。を。さ
氣。鼓。都。さう。さう。庵。中。小。さう。さう。さう。奇。異。の。更。み。お。り。い。二。人。の。女。僧

ひとく 語出夢あらせりし津島尾がえりて所も又花子の夢
 半點のふひあり。さうして 往年死美のいひくぞ。天堂ふ
 化を受くらんといふとあめくあひえ遠年を経く同
 至同日時もさうして二人の尾眠るがぞく大往生を遂めり。その
 後舞馬の禍あり。此寺一時不徳猶とあり。火鎮ましく後一堆の
 灰を抄ふ不徳あり。鉦鼓仏前ふあり。焼く。鑑輔を
 ろくユくぞ。圓通の尊像と并どあり。殊更靈驗揚馬と
 諸人奇異のおめひをなく。鉦鼓觀音とあつひく。かたり
 くとらん彼圓順も仏門の志あり。日本回國の修行
 者圓順といふ。供養石碑もと圓くあり。それとを
 けり詳ふと。いふありと本意を遂るべ何れか書の

又く 口碑ふとぞ。やうん 物嘆くん 竟るらんや

霜夜星五卷 畢

結心 かな

加波しう 北新画

柳子 種彦作

板本師 酒井宗嫡

萬飾止書
阿波鳴門 全五冊出未

復道水挑川書
徳南物語前編 二冊出未

文化五年戊辰春正月吉日

嘉永元戊申年求板

浪華 河内屋太助

心齋橋筋博労町

河内屋茂兵衛

同

河内屋藤兵衛

大坂書林

